

沖縄県における野犬のレプトスピラ 保有状況について (予報)

疫学室 福村圭介

我々は目下、人畜共通伝染病の一つであるレプトスピラ (以下Lと略する) の浸淫状況を調査している。今回は我々の身近に生息し、L保菌動物として重要な野犬についてLの感染状況を調査したので、なお調査は続行中であるが、L症の予防対策に資するため、これまで得た結果を予報として報告する。

材料および方法

野犬は沖縄本島中南部市町村、保健所および犬管理所が捕獲したもので、1976年10月から11月の間に県犬管理所にて処分のため集められたものうちから60頭を無作為に取り出し検策を行った。なお、これらの野犬は捕獲後犬管理所にて1週間前後保管飼育されたものであった。また、検索に用いた野犬の詳細な捕獲地は不明であるが、沖縄本島中南部地区である。

Lの分離培養は、PH 7.4のPBSにて10%腎乳剤を作り、5-Fluorouracilを100 $\mu\text{g}/\text{m}\ell$ の割りに加えたStuart培地に1m ℓ 入れ、30℃にて培養した。

分離Lは3-4代Stuart培地にて継代増殖させ、型の如くCanicola-Hond Utrecht IV, Pyrogenes-Salinemおよび, hebdomadis-Hebdomadisの各抗血清を用いて、型の如く顕微鏡的凝集反応を行い血清型を決めた。

結果および考察

今回60頭の野犬腎臓よりLの分離培養を試みたところ、22頭の腎臓よりLが検出された。分離陽性犬の性別差は、例数が少ないためか、著明な差は

みられなかった。しかし、分離陽性率は他府県と

表一 野犬の腎臓からのレプトスピラ分離

性	レプトスピラ分離	総 数
♂	9 / 27 (33.3%)	22 / 60 (36.7%)
♀	13 / 33 (39.3%)	

は比較にならない程高く、特に注目される。例えば今村等による1976年群馬県での調査結果、濃厚汚染地区でさえ10%余の陽性率で、本県の1/3でしかない。

県下には4万頭余のいわゆる野犬が生息していると推定されており、これら野犬は人畜への直接的被害はもとより、適切な飼育管理のもとにある撃留犬と同様人間へのL症感染源として、公衆衛生上重大な問題である。我々は既に報告した如く、犬にみられるcanicolaによる感染症と推察される患者の発生を報告した。従って、本症の予防対策の一環としてでも、野犬対策を強力に推進する必要がある。

分離Lの血清型は1株を除きcanicolaと決定した。抗canicola血清と反応しなかった1株は、表示してある抗Salinem、抗Hebdomadis以外に抗Akiyami A、抗Veldrat Bataviae 46血清にも反応を示さず、今後更に検討したい。

表-2 分離株の血清学的性状

株	抗血清	H. Utr. IV	Salinem	Hebdomadis
H Utr. IV		10,000	300	< 100
Salinem		300	1,000	< 100
Hebdomadis		< 100	< 100	10,000
C-50		10,000	300	— *
C-59		10,000	300	—
C-61		10,000	300	—
C-64 **		—	—	—
C-70		10,000	300	—
C-71		10,000	300	—
C-72		10,000	300	—
C-73		10,000	300	—
C-74		≥30,000	300	—
C-75		10,000	300	—
C-76		10,000	300	—
C-77		10,000	300	—
C-78		10,000	300	—
C-79		10,000	300	—
C-87		10,000	300	—
C-93		10,000	300	—
C-99		10,000	300	—
C-110		10,000	300	—
C-111		10,000	1,000	—
C-112		10,000	300	—
C-114		10,000	300	—
C-115		10,000	300	—
C-116		10,000	1,000	—

* — は100倍以下を表わす。

** この株は抗 Akiyami A 抗 Veldrat Bataviae 46 にも100倍以下であった。

本永は野犬および検査依頼犬30頭の血清検査を行ったところ、12頭(40.0%)が300倍以上の反応を示し、そのうち2頭にワイル氏病の病原体であるicterohaemorrhagiaeに反応するものがあったと報告している。今回の我々の調査結果からも、従来多くの報告にある様に、犬の場合 canicola に

感染している割合が、他のL血清型に比較して高かったが、icterohaemorrhagiaeは分離されなかった。

以上のことから、本血清型L症の予防対策として、野犬対策と相応して畜犬に対して本血清型ワクチンを接種しておくことは、飼育犬に対しては勿論、人間への感染源対策の一環として有効である。

稿を終えるにあたって、材料採取に御協力いただいた犬管理所国吉真英博士および同所職員の方々、また種々便宜を計っていただいた環境衛生課喜久嶺政男氏に謝意を表わします。

参考文献

1. 今村晋, 他: 群馬県におけるイヌのレプトスピラ浸淫状況について、第13回レプトスピラシンポジウム記録、1976年。
2. 本永博一: 犬及び牛を対象としたレプトスピラ抗体分布調査成績(予報)、琉球政府家畜衛生試験場研究報告、第3号、15、1962。
3. 福村圭介, 他: 沖縄県に於けるレプトスピラの研究、2、沖縄本島におけるレプトスピラの調査、沖縄県公害衛生研究所報、第7号、104~109、1973年。